



特別賞 三省堂書店賞

吉田満著『軍艦大和』（銀座出版社 1949）
（中央書庫：915.9/293/H）

法学部3年 浅沼駿孝

「軍艦大和」。日本が世界に誇る屈指の軍艦。当時の日本の最高技術を結集させ造られた「大和」は日本の期待と希望の象徴であった。そんな「大和」最後の作戦「沖縄特攻作戦」の際の乗組員であり、奇跡的に一命を取り留めた吉田満。彼の視点から描かれた体験的戦後小説が本編である。

吉田満は大学繰上げ卒業後、海軍少尉に任官し、副電測士として「大和」に入艦する。そして、「大和」の搭乗員として、その最後を見届けることになった。

死地に赴くにあたっての兵士たちの葛藤。なぜ、自分たちは死ぬことになったのか、この死はいったい誰のためなのか。自己の死の抛り所を求める、兵士たち。この自己の死の正当化を求めるところに、理解よりも政府が戦争を独断的に進めていった背景が目に見える。一兵士が上官に自分の死は誰のためなのか激しく詰問する場面に心打たれる。生キントスルカ、尊キカ、醜キカ、思ヒ惑フナ。この一文に吉田の覚悟と悲哀が入り混じりあう。

吉田満のこの作品は残酷さ、悲惨さを脚色して強調しているような感じがしない。ありのままを意識しているといえはわかりやすいだろうか。自分を第三者側に置いて客観的に描いている。他の作者の描く戦後文学よりも感情移入の描写が、少ない。吉田は、そこに作者の思想に動かされずに真実、ありのままを見てほしいというメッセージを込めている。

小学生のころテレビで爆撃映像が流れた。どこかで、戦争でも起きたのだろうかと思った。それは、イラク戦争開戦の映像だった。その映像を見て僕は登校した。何ら変わりのない日常が続いた。僕にとって、それは世界のどこかで起きている映像に過ぎず、テレビの中の戦争だった。戦争に関して、非日常であり、それは自分という個人がまるで関わるものがないものだった。

著者は、戦争に参加していた人だからこそ、思いがある。一兵士として、生きて戻ってくることはないと思う人物だからこそ、鬼気迫るものがある。そこには、悲惨、無残、言いようのない汚らわしさがこびり付いている。現在のスッキリ、サッパリをよしとする環境にいる僕たちは、まるで油汚れを放置してベタベタとした、それを忌避し洗い落とそうとする。しかし、洗い落とすことはできず、ねっとりとして読者の気持ちにまとわり絡みついてくる。だから、僕たちはそれをあえて見ない。見てみぬフリをする。だが、戦争を考える際に見てみぬフリをしてはならない。観点を欠落させてはいけない。都合のいいように考えてはいけない。それは、著者がこの本を書いた意に反することになるだろう。いや、戦争文学の存在の否定だ。

一時期、中国や韓国との関係が目に見えて悪化した。また、流れに任せて憲法も改正してしまうのではないかと危機感も近頃再噴出してきた。ただ戦争反対といたいのではない。それを肯定するも否定するも、まずは戦争文学というものを読んで、実情を知り考えてほしい。その上で議論し自分の意見を表明してほしい。僕たちは、戦争を経験したわけではないし、一兵士でもない。ただ考えることはできる。思うことはできる。その行為を自ら捨ててしまっ

